

2024 年度 西洋政治思想史Ⅱ 学期末試験問題

1 知識問題 (1 問 1 点×40 問)

『自由論』の著者 1 (ジョン＝スチュアート・) ミル は 19 世紀半ば、インドの停滞性を理由に、イギリスによるインド支配を正当化した。アレクサンドロス大王の家庭教師も務めた哲学者 2 アリストテレス は奴隷制を正当化した。スペインによるアメリカ大陸植民地化の初期に、 3 ラス・カサス は植民地化の非人道性を告発した。スペイン最古の 4 サマランカ 大学は 5 ビトリア から優れた国際法・政治学者を輩出し、彼らの議論はグロティウスにも影響を与えている。マキャヴェリはイタリアの 6 フィレンツェ の生まれで、『君主論』では有能な独裁者を称賛し、『 7 ローマ史論 or リヴィウス論 』ではローマが 8 混合政体を取り、またイタリア諸都市とは異なり、 9 傭兵 ではなく市民軍を備えていた点を称えた。中世末期以降、多くのキリスト教会改革運動がおこり、清貧を唱えた 10 フランシスコ 修道会などが著名である。イギリスの 11 ウィクリフ は聖書の英語訳を行い、教会を批判した。チェコでも 12 フス が教会改革を唱えたが火あぶりにされた。 13 アウグスティヌス 派修道会に属した 14 ルター は、1516 年にカトリック教会を批判して宗教改革の火ぶたをきった。 15 フランス 生まれのカルヴァンは 16 ジュネーブ で神政政治をしいた（フランスではカルヴァン派は 17 ユグノー と呼ばれる）。フランスでは宗教内乱が生じ、カルヴァン派の 18 モナルコマキ が暴君放伐論を唱えるが、これを批判して 19 ボダン が主権論を唱えた。フランスの宗教内乱は国王 20 アンリ 4 世 のカトリック改宗、および 21 ナント の勅令発布によって収まった。しかし、この勅令は孫の 22 ルイ 14 世 によって撤回されてしまう。イギリスでは、スコットランド出身の王 23 ジェームズ 1 世 の治世以降、王権と議会やカルヴァン派との間で対立が高まり、次の王 24 チャールズ 1 世 は議会との内戦に敗れて処刑され、議会の軍事指導者 25 クロムウェル を護国卿とする共和政が樹立された。この頃、ホブズは『 26 リヴァイアサン 』を公刊する。内戦後に活躍したロックは、『 27 統治二論 』を執筆し、名誉革命を支持した。モンテスキューは共和政、専制政治、ならびに君主政の原理を、それぞれ 28 徳 、 29 恐怖 ならびに 30 名誉 とし、世襲貴族に依拠した君主政を擁護した。ヒュームは商業発展に基本的に肯定的であったが、 31 公債 の安易な発行による国家破産を危惧した。ルソーは、『 32 人間不平等起源論 』において、人間には本来、自己保存欲と 33 憐憫 という二つの本性があったが、後者は文明化によって衰弱し、最終的に極度に不平等な社会が確立されてしまうと批判し、『 34 社会契約論 』において人民主権に基づく平等な社会の確立を提唱した。アダム・スミスは『 35 道徳感情論 』において、人々は 36 共感 の働きによって、恐怖や権力なしでも協力関係を築けるとし、この考えは市場の自律性に信頼をおいた『 37 富国論 or 諸国民の富 』での経済論へとつながる。18 世紀後半およびフランス革命初期にフランスの財務大臣となった 38 ネッケル の娘スタールは、フランスに共和政を樹立しようとし、『 39 文学論 』では、文武両道の政治エリートを育成するための 40 段階 制の導入や、知識人・文学者の活躍に期待した。

2 論述問題 (1問20点×3問)

(1)～(6)までのうちから、2問選び、また(7)は必ず選んでください(計3問に答える)

(1)マキャヴェリは、自由を経験したことのない人民が、自由な国制を手に入れることは難しいと述べています。彼がそう主張した理由を踏まえたうえで、彼の主張が正しいかどうか、世界史の実例を挙げながら、自分の意見を展開してください。

【解説】 講義レジュメに基づいて、以下の二点について論述する。

①既存の君主制から利益を得る少数者たちは必死に君主制を守ろうとする。これに対して共和政を望む人々は、共和政が確立されても個人的に大きく得をするわけではない。そのため、そこまで自由欲が強くない→A 保守的な人民を革命支持のために立ち上がらせるにはどうすればよいか？

②自由を維持するために必要な知識・経験がない。そのため、自由を手放し、圧制に後戻りする。こうした逆境でも共和政を存続させるためには、指導者が家族を犠牲にするくらいの強い決意を持たなければならない→B そのような例外的な革命家は現れるか？(たとえば、マキャヴェリによれば、モーゼは、イスラエルの民を生まれ変わらせるために、腐敗した者たちの処刑や、長年にわたる荒野での放浪生活を強いた)。

AとBの問いに対して、世界史の例を挙げながら、議論する。

(2)近代ヨーロッパでは、商業の発展に伴い、知識人は教会や領主に経済的に依存せずに活動する自由を手に入れていきます。これは、教会・聖職者の知的優位を掘り崩し、近代革命を引き起こす原動力となります。しかし、現代社会では、インターネットの普及によって、誰もが情報発信を行える時代となり、知識人の特権、権威というものが、成り立たない状況が生まれています。知識人が不在の社会において、政治はどのように変化していくと考えますか。貴方の意見を自由に展開してください。

【解説】 講義レジュメや授業時の説明に基づきながら、以下の諸点(①～④)に答える(幾つかについて議論されていれば、及第点となる)。

西洋における独立した知識人階級の台頭の背景には、①経済活動の活発化に伴い、彼らの生活基盤を支える出版・公論空間が形成される、②知的な余暇を楽しむ名望家・地主層が存続する、③進歩・世俗化・社会の平等化、といった社会改革目標の存在、④教育格差を背景とする、知識人の民衆に対する権威、などの条件があった。これらの条件が、インターネット社会の中でどのように変化し、そこから予想される帰結は何であるのか、議論を展開する。

(3)モンテスキューは、商業発展を基本的には肯定しましたが、同時に、商人階層が政治的決定に介入する

事態を恐れ、商業には関わらない貴族層の活躍に期待をかけました。現代政治において、エリート（世襲貴族とは限らない）に一定の政治的役割を期待する、という構想は成り立つのでしょうか？それはどのようなエリートでありうるのでしょうか？具体例を挙げながら、論じてください。

【解説】講義レジュメや講義時の説明に基づき、以下の点について論じる。

貧富の差に基づき、富者が政治において不当に影響力を行使する（＝オリガーキー）という問題は、古代ギリシア以来、西洋政治学では問われ続けてきた。西洋中世社会ではキリスト教理念に基づき、蓄財は基本的に不名誉である、という観念が普及し、教会と貴族層が政治を主導していた。しかし、近代資本主義の発達によって、富者の政治的影響力に対する歯止めはなくなった（富裕層が政治を左右する現代アメリカの政治状況はその典型）。よって、この問題を解く際の出発点としては、①現代社会における富者の影響力をどうとらえるか、ということをはっきりさせる必要がある。つぎに、①を前提にして、②どのような改革が必要？どのようなエリートが必要か？という問いが来る。最後に、③そのようなエリートは可能か？という問いが来る。大体、以上のような構成（1 現状分析→2 問題解決の方法→3 その解決法には現実性があるか）にできるとよい。

モンテスキューは世襲貴族に期待したが、非世襲的な知的エリートに期待するという構想も過去・現在においては有力（中国などの科举制度、近代国家の官僚制）。世襲貴族も官僚制も、民衆に対する権威を失った現代において、何が新しい権威の基礎となりうるか、という問題を考えられるとよい（第二問で問うた、知識人の権威問題とも関連する問題）。

(4)ルソーは、利己的な個人が、社会契約によって政治社会を打ち立てるという議論を展開しており、この点ではホッブズの社会契約論と同じです。ただし、いくつかの重要な違いがあります。

ホッブズにおいて、人間は本性的に利己的で闘争的な存在です。これに対してルソーは、「人間は本来、自己保存欲（≡利己心）と憐憫（他者の苦しみに対して、苦しみを感ずるという性向）という二種類の本性を持っているが、憐憫の方は文明化によって弱まってしまうのだ」と述べています。

ホッブズにあっては、万人の万人に対する戦争をやめさせ、平和を確保するために、主権者の制裁・武力への服従によって社会が作られます。そこでは制裁への恐怖が機能することが大事です。これに対して、ルソーの場合は、全員一致の社会契約に全員が「自発的」に従うことが大事です。

まとめると、ルソーの場合は、社会契約への自発的服従・遵守が強調されていて、そのことが成り立つためには、利己心だけではなく、人間に固有の「憐憫」が何らかの形で作用しなければならない、ということになるでしょう。ルソーは宗教や公教育の意義を強調していますが、これらは、ホッブズのように、たんに恐怖や服従習慣を植え付けるためのものではなく、憐憫を感じたり、約束を守ったりする力を育てていくためのものです。

それではルソーにあって、①社会契約を順守する能力と憐憫とは、どのように関連するのでしょうか？ま

た、②Aを踏まえると、憐憫が約束を守る能力へとつながっていくには、どのような宗教や公教育システムが必要となるでしょうか？以上、①と②に教えてください。

【解説】 これは実は専門家でも答えることが難しい難問。

①について：ルソーは『人間不平等起源論』において、人類が知的に発達し、自他の区別、他者との比較を行うようになるにつれて、他者の感情への一種の同化能力としての憐憫は弱まっていくとしている。他方、社会契約や市民宗教では、自己の利益ではなく、共同体の利益を優先する一種の知的能力が必要になるとする。つまり、憐憫という自然的性向を、制度や教育を通じて、再び学び直すことに期待がかけられている。

②について：どのような宗教や公教育制度が必要であるかは、①に基づき、各自で自由に議論を展開する。

(5)社会内の紛争を解決するために、社会契約を結ぶ、というのがホッブズ、ロック、さらにはルソーの政治理論でした。そこでは、自由で意志を持つ政治主体が、約束によって国家を立ち上げ、その国家が政治社会の存続を保障する、という理論構成が採られていました。

これに対して、スミスにおいては、人々は基本的に利己的であっても（≡ホッブズ、ルソー）、人間関係の中で作用する「同感」（人に好かれたいという欲求）によって、己の利己心を無意識に抑制し、平和的に共存することができるという議論になっています。つまり、国家や約束ではなく、人間関係の中で自然と作用する社会化能力に、期待をかけるわけです。そしてそのような人間関係の典型が市場・取引関係だということになります（むろん、家族、隣人関係といった非経済的な人間関係においても同感は作用しますが）。経済活動さえ順調にいけば、国家機能は最小限で良い、という経済自由放任主義は、以上のような人間観に立脚しています。

しかし、経済関係においては、互いに対等の人々同士が互いの好感を得たいと思ってフェアな競争を行うとは限りません。貧富格差とそこから生じる力の格差を背景に、一方が他方を圧迫することは、容易に起こりうるでしょう（その場合は、「平和的な」経済関係は、偽装された力の支配となります）。ですから、経済競争が、人々の平等性を損なわないように、国家による介入が、やはりある程度必要となってきました。

それでは、国家による過度の介入を避けながら、「同感」作用によって自然な共存関係を築いていくためには、どのような政策が必要となるでしょうか？自由に議論を展開してください。

【解説】 これも難問。

現代のグローバル化し、複雑化した経済活動においては、取引相手の可視性が低下し、その結果、同感作用が働きにくくなっている。先進国による発展途上国の経済的搾取、国内における富裕者層の一般国民からの乖離（たとえば、グローバル・エリートの問題）、などはその例。したがって、貧富の格差がありつつも、富者に貧者のことを考慮させる経済的・社

会的条件はいかなるものか、そのためにいかなる政策が必要か、について論じる必要がある。

(6)ホッブズは、「人間は他者の殺傷能力においては皆平等である（体力が弱い者でも、隙をみて強者の寝首をかくことくらいはできる）」という大前提のもとに、絶対的権力に全員が従う平等な社会、という理論を展開しました。私たちの平等は、他者を殺す意志・能力における平等に基礎づけられているというのです。

しかし、現実社会では、皆が同じレベルの闘争欲を持っているわけではありません。恐怖や怠惰によって他者に屈従してしまうケースはしばしば起こります。実際、現実の人類社会は常に不平等でした。

ホッブズ理論の難点は、強大な主権者、教育、宗教などを介して、本来（自然状態）において獰猛な人々を馴致していこうとする一方で、人々がなんらかの意味において闘争的であり続けないと、平等社会が成り立たないところです（人々が平和に慣れて弱くなってしまうと、誰かが平等社会を破壊しようとする場合に、反撃できない）。

それでは、主権者・法律に服従しつつも、他人の暴力という・脅しには屈服しない、という二重性を保つような人間は、どのようにすれば保てるのでしょうか？自分の意見を自由に展開してください。

【解説】これも難問。

ホッブズ自身は、上記の二重性・二面性を維持する方法について論じているわけではないので、授業時に紹介した、この点についての論争史をふまえて、各人で考える必要がある。モンテスキューは、名誉欲のためには、君主の不当な命令に命を賭して抵抗することができる貴族的精神を讃えたが、ホッブズからすれば逆に、貴族的な名誉欲は、反乱や弱者への横暴を生み出す危険な情念であった（ヤクザのようなもの）。

正義感、弱者・平等を尊重する精神を持ちながら、勇敢さも兼備するためには、命を賭してでも正義や平等といった価値を守りたいという強い気持ちが必要。西洋では、殉教者の勇敢さ、愛国心に燃える兵士、といったモデルが提示されてきた。しかし他方で、殉教者の精神は受動的で現状改革の力にはつながらない、あるいは狂信につながる、愛国心は盲目的・排外的なものになりうる、といった反論も出された（ルソーの市民宗教に関するレジュメを参照）。以上、講義で紹介した論争史をふまえて、自分の意見を展開する。

(7)スタール夫人は、商業社会、憐憫、新しいエリート層の育成、といった、モンテスキュー、ヒューム、ルソー、スミスらが取り組んだ諸問題について、フランス革命後の新しい状況の中で考えました。さらに彼女の独自性は、女性の政治・社会的地位という問題に焦点を当てた点にあります。

スタール夫人は、政治エリート（おそらく男性）と一般国民とが遊離しないように両者を架橋する、知識人層および文学者層が必要だと考えました。知識人層（おそらく男性）は、政治家ではないが政治に批判

的に関与します。文学者（女性も多い）は、政治に直接関与しないが、物語・小説の執筆を通じて、読者＝国民の道徳心・政治への関心を育てます。

さらに、スタール夫人は、男性社会において女性が男性と同じ政治土俵で競争すれば、不幸に陥るだろうから、女性は文学者としての役割で満足するべきだと主張しました。

①女性は文学を通じて政治に関与すべき（現代社会であれば、必ずしも作家になるということではなく、インターネットなどを通じて、間接的に政治に関与していく可能性もあり）、というスタールの構想はどう評価されるだろうか？②女性は政治空間における男性との競争を避けるべき、という考えは古臭い発想だろうか？①、②について、自分の意見を自由に展開してください。

【論争】 講義レジュメを踏まえながら、解答する。

スタール夫人の政治理論は、女性の社会的立場の向上を目指すと同時に、本来的に闘争的な政治空間と、共感・憐憫に支えられた近代社会とをどのように和解・接続するかという理論的問題に答えようとするものであった。知識人・文学者層は、政治空間と近代社会の中間に位置して、闘争的な政治空間の平和化を推進する役割を担う（政治に直接関わらないからこそ、一般市民の目線から政治を批判することができる）。そして闘争には不向きな女性は、知識人・オピニオンリーダーとして直接政治的発言を行うのではなく、文学活動を通じて、間接的に近代社会の市民道徳の形成に寄与するべきだ。以上のようにスタール夫人は考えた。

政治家になることと、市民的目線で活動することとは両立しない、とくに女性の本来の資質は政治活動と相性が悪い、というスタール夫人の立場は、女性の政治参加を唱え、議員数の男女同等化を推進する近年の先進国の政策と大きく異なる。とはいえ、政治活動と一般市民として生活することの緊張関係は、現代でも解消されたとは言えない。また、近年ではインターネット・SNS を舞台にして独自に政治的影響力行使する人々も増えている。したがって、スタール夫人の立場を古臭い議論として一蹴するのではなく、現代的な問題につながる問題提起と捉えて解答する必要がある。

【総評】

本講義では、世界史（西洋史）的な知識の習得を前提として、現代の問題意識を持ちながら、過去の政治理論・論争と対話するという姿勢が求められる。そのために、知識問題と論述問題が組み合わせられ、また論述問題において、講義で解説された政治思想の知識を前提に自分の議論を展開することが求められている。

論述問題では、論述力・論理的思考力が必要であり、講義で配布されるレジュメの暗記では、対応することができない。講義時に数回、論述の小テストを実施し、解説を行っているが、それに加えて、自分でも論述対策を行うことが必要である。